

# 火の記憶

森岡 正作

椿挿す硝子の瓶に火の記憶  
低き山ばかり雑魚寝の山笑ふ  
島の土忘れじと踏み卒業す  
唸り上ぐ木地師の轆轤水温む  
木道を行くかたかごの花揺らし  
産卵の魚の瀬につく猫柳  
門までは春月抱いて帰りけり

## 花莫塵を

登四郎先生には何と言っても桜の句が多い。傍題なども遍く詠んでいるが、特に「花冷え」の句は二十句ほどある。

一句一句に先生の桜を見る角度、思い入れが違うことに勉強させられるのであるが、有名な句に「花冷えや老いても着たき紺緋」があり、第三句集「枯野の沖」に載っている。更に全集を読み進めて、第五句集『幻山水』の中で「花莫塵を敷くさらさらと花こほし」に出会った。

田舎の我が家には大きな桜の木があつて、満開の時には村の人達がよく花見を催した。今でこそ花見の席にはブルーシートが重宝されているが、当時は一軒一軒が一、二枚の莫塵を持ち寄った。頭上を花びらが舞い、莫塵に置かれた重箱の料理には花びらが滑り込んだ。掲句には、もう疾うに鬼籍になつてしまつた人達が、和やかに笑い合っている姿が思い出される。と同時にそうした懐かしい人達が今も桜の雲の上で、心地よく踊っているようにも思えるのである。